

論文、緊急提言

ウクライナ危機はリベラルな価値観に挑戦している

ヤコブ・ラブキン

モントリオール大学名誉教授

(長沢美抄子訳)

ウクライナへの悲劇的な侵攻は、リベラルな価値観（注1）に挑戦するだけでなく、その価値観そのものを改めて問い直させている。ここ数十年のリベラリズムが達成したことのひとつは、人種、国家、民族、性的マイノリティに対する憎悪を公の場で表出することが減少したことである。ヨーロッパの血なまぐさい植民地拡張に何世紀も付きまとった人種差別は、欧米の政治、メディア、企業の指導者の間で後退しているのは間違いない。リベラルな団体の一部では、「男」「女」という言葉さえも使うことが避けられている。数週間前、マンハッタンのある劇場で、私は2つのトイレのドアのうち、どちらを選べばいいのか迷ったことがある。どちらのトイレのドアにもまだ世の中では流通していない新語の表示も、また馴染みのある男女の違いを表す靴や服装だとかシルエットなどの絵もなかったのだから。

ウクライナの苦境がこのように多くの人々に共感と憤りを呼び起こしているのは、十分に理解できることであり、当然のことである。しかし、驚くべきは、ロシアといえば何から何まで憎悪する対象になっていることである。先週、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団は、スター指揮者ヴァレリー・ゲルギエフ氏がウクライナ侵攻非難を拒否したということで、同氏を解雇した。名高いフィルハーモニー管弦楽団は、（プーチン）大統領非難に公式に署名するか、さもなければ契約打ち切りを選ぶかと、指揮者に要求していたのだ。この話は、かつてスターリンのソ連や毛沢東主義の中国で行われた「敵」を糾弾せよ、自分の親であっても「敵」として糾弾せよ、という要求があった過去を思い起こさせる。

しかし、この出来事においては彼がどのような政治的なスタンスを取ったのかについては問われてはいないようだ。モントリオール交響楽団は「ロシアの侵攻が与えたウクライナの民間人への甚大な被害を念頭に置いて」、ロシアの若く才能あるピアニスト、アレクサンダー・マロフェーエフとのコンサートを中止した。このピアニストが自国の軍事作戦を非難していたにもかかわらず、このような決定が下されたのである。ロシア人であることが十分に悪いのである。もし19世紀の作曲家がこの戦争を知ったらどう思ったかは知りようもないが、「ロシアの侵攻を念頭に置いて」英国のカーディフ（ウェールズの首都）

で予定されていた全曲チャイコフスキーのコンサートが中止された。ロシアの猫でさえ、国際猫連盟（FIF）の大会への参加が禁止された。個人から集団へ、人間から猫へとキャンセル文化が拡大しているのである。ロシア人、ロシア産であること自体が悪であるかのようだ。政治的な信条や歴史がどうであれ、ロシア人に対してはどんな仕打ちをしてもすべて正当化されるフェア・ゲームであるかのようである。一部のソーシャルネットワークでは、ロシア人がターゲットであれば、憎悪の投稿が許可されている。

ヨーロッパにある、またリベラルな街であるマンハッタンのロシア料理店でさえ、ボイコットや嘲笑、あるいはそれ以上悪い攻撃の対象になっている。マンハッタンにある95年の歴史を持つ由緒あるロシアン・ティールームは、ロシアによる隣国への攻撃とは何の関係もない、とCNNは報道で説明しなければならなかった。ニューヨークの別のロシア料理店には、店員をナチス呼ばわりする罵倒の電話が何十本もかかってきた。ヨーロッパと北米の各地で、ロシア料理店や、ロシアとおぼしきレストランや学校に、数限りなく同じような攻撃が降りかかっている。メニューの変更を余儀なくされたレストランのオーナーもいる。ロシア料理は、より“不快”でなさそうな東欧料理メニューのものとして改名されることになった。

驚いたことに、このような無差別の憎悪は、主として、人を傷つけるような言葉や表現に常日頃から気を遣うリベラルな陣営から発せられている。この現象は、「ジャップ」、「ボッシュ」、「フン」という軽蔑した呼び方が何の抵抗も障害もなく許された（注2）、20世紀の二度の世界大戦中の世の中の雰囲気を読み起こさせる。1915年には、ノーベル賞受賞者を含む英国やフランスの著名な科学者が、愛国心にかまれてドイツの科学全体を悪者扱いした。それとは逆に、レニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）がドイツ国防軍に包囲されていた最中でも、凍てつくホールで演奏するレニングラード・フィルハーモニーのレパートリーからバッハやベートーベンをはずそうとは誰も考えもしなかった。また、冷戦時代の最も緊迫した時期であっても、ロシアン・ティールームはマンハッタンのおしゃれで粋な場所であり続けたし、ソ連のピアニストやバレエ団は世界中で満員の聴衆を前に公演を続けていたのである。

ロシア人に対する大規模な憎悪の念はどこから来るのだろうか？ モントリオール交響楽団の場合、「ウクライナ人コミュニティから、マロフェーエフの公演を中止するよう要求されたため中止が決定された」と報じられている。確かに、旧ソ連邦のいくつかの共和国では、反ロシア感情が普通に存在している。1991年に、これらの共和国が成立したとき、当時のそれぞれの統治エリートが自らの正当性を確保するために、エスニック・ナショナリズムは最も都合の良い方法として利用された。それまではソ連の体制に憤りを感じていたが、この反ソ連の態度は、ほんの数ヶ月のうちに反ロシアの態度へと変わっていつ

た。バルト三国では、ロシア語を話す者は市民権を拒否され、ロシアに一度も住んだことのない者でも「ロシア系住民」として公然と非難された。ロシアによるウクライナ侵攻の数カ月前の2021年8月、自身もロシア語を母国語とし、ロシアの芸能界に長く関わってきたウクライナのゼレンスキー大統領は、ロシア人と自認するウクライナ市民を公然と軽蔑し、彼らにロシア連邦へ移り住んだらどうかなどと述べていた。このような現象は、東欧では決して新しいものではない。だが、問題はこうした傾向が他の地域でも急速に広がっていることだ。

21世紀初頭、欧州連合（EU）が東欧諸国を含む地域への拡大を検討していたとき、私のドイツ人研究者の同僚は、この拡大を危惧すると話していた。この拡大によって東欧各地に深く根付いているエスニック・ナショナリズムと人種差別主義が、これらを根絶する努力を何十年も重ねてきたドイツや他のヨーロッパ諸国を汚染するのではないかと彼は懸念していたのだ。どうやら、彼は正しかったようだ。

このことは、東欧におけるウクライナ難民に対する破格ともいえる好意的な歓待ぶりにもはっきり表れている。今回ウクライナ難民を受け入れている国々の中には、比較にならないほど残虐な米国の軍事介入で破壊されたアラブ諸国やアフガニスタンからの難民を断固として受け入れ拒否をした国もあるのだ。ウクライナのある幹部高官は、あけすけにこう語っていた。「青い目とブロンドの髪をしたヨーロッパ人たちが毎日殺されているのですよ」と。明らかに、米国とその同盟国がイラク、シリア、リビアに侵攻した際には、異なる種類の人々が殺されていた。なるほど、だから、（中東への軍事介入に際して）アメリカのミュージシャンに対するボイコットも起きなかったし、メルセデス・ベンツの米国からの撤退も起きなかった、ということの説明がつくわけである。ワシントン（米国）やロンドン（英国）に懲罰的な制裁を課す国はなかったのである。偽善の極みである。

ウクライナ危機は、リベラルな価値観のもろさを露呈した。ロシアフォビア（ロシア恐怖症、またはロシア嫌悪症）は、最も進んでいるとされる文明国家において今や花盛りである。あるウクライナ系カナダ人の友人は、報復を恐れて、外では幼いわが子にロシア語で話しかけているのを聞かれるのを怖がっている。また、ベルギーやドイツでは、ロシア語や、皮肉にもウクライナ語を話す人々が公共の場で侮辱されている、という報道もある。そのため、ノルウェーの外務大臣はツイッターで、あえてロシア語を用いて「われわれの社会ではロシア人を大切にし、ヘイトスピーチに対して反対の声を上げるように」と呼びかけなければならないほどだ。

こうした無分別なロシア恐怖症は、極めて反リベラルであるばかりでなく、逆の効果も与えている。ロシア人、それも侵略に懐疑的で批判的なロシア人たちを、ロシア国旗の周り

に結集させる（愛国的にさせる）ことを促すのである。そして彼らは、リベラルなエリートたちによるウクライナ人への現在の広範な支援を、もう一つの度を越した唯我独尊、偽善、二重基準と見なすしかなくなるのかもしれない。

注1：リベラルな価値観は本稿の中心概念になっているが、著者の以下の具体的な説明が参考になる。現代の欧米社会は、政治的・経済的自由、男女平等、性的・エスニック・マイノリティーを尊重する「リベラル」であると自画自賛している。多くの言葉を禁ずるポリティカル・コレクトネスに従わなければならない。ニグロとかブラックと言ってはいけない。アフリカン・アメリカンと言わなければならない。男や女という言葉でさえトランスジェンダーにとって不快な言葉であるため、使うことはできない。そのため、ニューヨークの劇場では、トイレのドアにこれらの言葉は使われていなかった。また、近年では、歴史上の人物の記念碑が破壊されたり、セクハラで訴えられたアーティストが追放されたり、リベラルな価値観にそぐわないという理由で講演が禁止される「キャンセル文化」が台頭している。

注2：ボッシュとフンはドイツ人の蔑称。著者はこの文章を以下のように言い換えてもいる。この現象は、第二次世界大戦中の社会の空気を思い起こさせる。欧米諸国では民族的侮辱が完全に容認されていただけでなく、米国やカナダの当局は、日本、イタリア、ドイツ系の市民を何の正当な手続きもなしに強制収容所に押し込めたのである。

著者 (Yakov Rabkin) はモントリオール大学名誉教授 (歴史学)。1945年、現サンクトペテルブルグ生まれ。レニングラード大学で化学を学び、ソビエト科学アカデミーで科学史を学ぶ。1973年からモントリオール大学に招かれ、科学史、ユダヤ史を講じる。国際問題の論説は数多く、メディアでの解説者としても知られている。シオニズム運動とイスラエル建国との関わりを歴史的に論じた著書『トーラーの名において—シオニズムに対するユダヤ教の抵抗の歴史』（菅野賢治訳）平凡社、『イスラエルとは何か』（菅野賢治訳）平凡社新書がある。また、ウクライナのキエフ・モヒラ・アカデミーに招聘され、2015年から19年にかけてユダヤ現代史とイスラエルについて講義、チェルニーゴフ、ポルタヴァ、チェルノフツィー、オデッサなど地方都市でも講演をした。近著に *Demodernization: A Future in the Past*, *Science between the Superpowers*, *Judaïsme, islam et modernités* がある。2008年から2017年まで7回、同志社大学、明治学院大学、東京大学、アジア経済研究所等に招かれ来日。全国各地で講演をした。

(以下に英語原文を掲載しています。)

Ukrainian Crisis Challenges Liberal Values

By Yakov Rabkin

The tragic invasion of the Ukraine not only challenges liberal values, but it also puts them on the spot. One of the achievements of liberalism in recent decades is a decline in public expressions of hatred towards racial, national, ethnic, and sexual groups. Racism, which accompanied Europe's bloody colonial expansion for centuries, is rightly in retreat among Western leaders in politics, the media, and workplaces. Even the terms "man" and "woman" are avoided in some liberal circles. A few weeks ago, in a Manhattan theatre, I was uncertain which of the two toilet doors to choose since none had those two newly unacceptable words or even respective silhouettes marked on them.

It is completely understandable, and natural, that Ukraine's predicament is provoking sympathy and outrage among so many. But what surprises is the hatred of everything Russian. Last week, the Munich Philharmonic fired star conductor Valery Gergiev after he refused to denounce the invasion of Ukraine. The famed philharmonic had asked him to sign a public condemnation of the president or lose the contract. This brings to mind demands to denounce "enemies", even one's own parents, that used to be made in Stalin's Soviet Union and Maoist China.

But a political stance does not seem to be at issue. The Montreal symphony annulled concerts with talented young Russian pianist Alexander Malofeev, "considering the serious impact on the civilian population of Ukraine caused by the Russian invasion". This happened despite the pianist's denunciation of his country's military operation. Being Russian is bad enough. Since it is impossible to find out what the 19th century composer would have thought of this war, an all-Tchaikovsky concert was canceled in Cardiff, Britain, "in view of the Russian invasion". Even Russian cats have been banned from participating in the International Cat Federation (FIF) competitions. Cancel culture has expanded, moving from the individual to the collective, from humans to felines. Being Russian seems to be bad in itself. It appears Russians, whatever their political allegiance or history, are fair game. Some social networks have even authorized hate posts as long as they are directed at Russians.

Russian restaurants in Europe and even in liberal Manhattan have become objects of boycott, derision or worse. CNN had to explain that the venerable 95-year-old Russian Tea Room in Manhattan has nothing to do with the Russia's attack on her neighbor. Another Russian restaurant in New York received dozens of abusive phone calls calling the staff Nazis. Numerous

similar attacks have fallen on Russian and even remotely sounding Russian restaurants and schools across Europe and North America. Some restaurant owners have been forced to reformulate the menu: Russian dishes are now renamed as less “offensive” East European ones.

Surprisingly, this indiscriminate opprobrium comes mostly from liberal quarters that are usually careful about words and expressions that may hurt people. This phenomenon reminds one of the public mood during the 20th century’s two World Wars when “Japs”, “Boches” and “Huns” were perfectly acceptable terms. German science as a whole was vilified in 1915 by prominent British and French scientists, including Nobel laureates, imbued with what they deemed as patriotic spirit. Conversely, nobody thought of dropping Bach or Beethoven from the repertoire of the Leningrad Philharmonic performing in the frost-bitten hall during the Wehrmacht siege of the Soviet city. And even during the tensest moments of the Cold War, the Russian Tea Room remained a chic Manhattan destination, and Soviet pianists and ballet companies continued to perform around the world to full audiences.

Where does this wholesale hatred of Russians originate? In the case of the Montreal Symphony, it was reported that “the decision followed a request by members of the Ukrainian community that the orchestra cancel Malofeev’s performances.” Indeed, anti-Russian sentiment is common in several former Soviet republics. When these were formed in 1991, ethnic nationalism emerged as the most convenient means of legitimation for the power elites. While resentment had been directed at the Soviet system, this anti-Soviet attitude gave way, within months, to an anti-Russian one. In the Baltic republics, Russian speakers were denied citizenship and even those who had never lived in Russia were publicly accused of being “Russian occupants”. In August 2021, months before the Russian invasion, Ukrainian President Zelensky, himself a native Russian speaker and long involved in Russia’s entertainment world, publicly scorned those Ukrainian citizens who consider themselves Russian and suggested they moved to the Russian Federation. This dynamic is not new to Eastern Europe; however, it has rapidly spread elsewhere.

When in the early 21st century, the European Union was considering enlarging its borders to include Eastern European countries, a German colleague of mine remarked that he feared this expansion. He was concerned that ethnic nationalism and racism so rooted in those lands might contaminate Germany and the rest of Europe that had devoted decades of consistent efforts to eradicate it. Apparently, he was right.

This has been in evidence in the otherwise admirably generous welcome offered to Ukrainian refugees in Eastern Europe. Some of the very same countries embracing them had categorically

refused to accept refugees from the Arab countries and Afghanistan ravaged by incomparably bloodier U.S. military interventions. One Ukrainian top official put it bluntly: “European people with blue eyes and blonde hair are being killed every day”. Obviously, people of a different kind were killed when the United States and its allies invaded Iraq, Syria, Libya. This might explain why there was no boycott of American musicians, nor did Mercedes Benz withdraw from the United States. There was nobody to impose punishing sanctions on Washington or London, hypocrisy at its best.

The Ukrainian crisis has exposed the fragility of liberal values. Russophobia continues to blossom even in the most enlightened countries. A Canadian, part Ukrainian friend is scared to be heard speaking publicly in Russian to her toddler for fear of reprisals. And there have been press reports from Belgium and Germany about Russian and, ironically, Ukrainian speakers being insulted in public.

So much so that Norway’s Foreign Minister had to issue a call on Twitter, in Russian, “to take care of Russians in our society and speak out against hate speech.”

This wanton Russophobia is not only profoundly illiberal, but also counterproductive. It forces Russians, those skeptical and even critical of the invasion, to rally around the flag. They may end up viewing the current widespread support for Ukrainians by liberal elites as another orgy of self-righteousness, hypocrisy, and double standards.

The author is Professor Emeritus of History at the University of Montreal; his recent books are *Demodernization: A Future in the Past* and *Judaïsme, islam et modernités*.
yakov.rabkin@umontreal.ca